

雪舟による山水画の空間構成に関する研究

— 14 組 21 幅の掛幅を対象として —

真木利江 (感性デザイン工学専攻) 関本佳奈 (感性デザイン工学専攻)

The spatial composition of Landscape paintings by Sesshu.

— Analysis of 21 Hanging scrolls —

Rie MAKI (Lecturer, Graduate School of Science and Engineering)

Kana SEKIMOTO (Graduate Student, Graduate School of Science and Engineering)

Sesshu is famous as the great artist in Muromachi era. The aim of this paper is to clarify the spatial composition of landscape paintings by him. This paper focuses twenty-one Landscape paintings drawn as Hanging scroll. In consequence, these can be divided into five types: 1)Intermitting and Rising, 2)Curving by both sides, 3)Curving by one side, 4)Zigzag line and 5)Contrast of near and far.

Key Words: Sesshu, Landscape paintings, Spatial composition

1. はじめに

本研究は、雪舟(1420-c. 1506)の真筆とされている山水画を対象とし、そこに描かれる山水の空間構成の特徴を明らかにすることを目的とする。

現在、われわれをとりまく環境に対する社会的な関心を背景に、技術的な観点からのみならず、文化的な観点から総合的に風景の中に生きる人間のあり方が広く問い直されている。日明貿易等により中国から日本にもたらされた山水画は、室町期の禅林を中心にはぐくまれ、庭園、文学、建築、茶道や華道と深く結びつきながら日本独特の造形の原型をかたちづくることになる。また水墨山水画の多くは詩画軸の形式を持った書斎図として制作され、「山水臥遊」といわれるように、現実にはあわただしく騒がしい所にいたとしても、心中は静かな山水に隠棲するといった禅の理想に結びついた内容となっており、山水画は自然の風景の中で本来の生を生きる契機となっていたと考えられている。

当時中国よりもたらされた山水画のうちいくつかは日本において規範として扱われ、画家達はこれらの作品を繰り返し模写することを通して山水画を受け入れていった。雪舟は室町期を代表する存在であるのみならず、直接に明にわたり、その山水を直接目にし、帰国後も旅を通して各地の風景に触れ、中国の山水画の単なる模写にとどまらない独特の境地を開いた画家ととらえられている。

明治期以降、美術史の分野においては、雪舟に関する膨大な研究が蓄積されてきた¹。また専門の研究者に限らず著述家、作家による多様な言説が存在している²。しかし、画家と作品に対して非常に高い評価が与えられる一方で、その評価は「画聖」「禅僧」といった漠然とした論拠にもとづいたものとなっており、絵画自体を対象とした研究が十分に進んでいないことが、近年の美術史分野においても反省されている³。建築学において、絵画に描かれた風景を分析する主な先行研究として浮世絵や 19 世紀風景画を対象とするものが挙げ

られるが、中世の山水画を対象として、その空間構成を問う研究はほとんど存在しない⁴。

われわれは雪舟の山水画を、室町期に理想化され、表象され、共有され、生きられた作品と捉え、当時における風景とその表象の型、つまり自然に対する文化的な型を見いだすことを意図している。しかし、そのためには今後本研究は2つの方向へ拡張される必要がある。まず室町期に山水が生きられた文化的背景や、個々の山水画の持つ意味の解明である。また、同時代の山水画へと研究対象を拡大し、比較検討する必要がある。本稿はこうした展望のもとにある第一報である。

2. 研究の対象と方法

2-1. 雪舟の山水画

雪舟の真筆とされている水墨山水画のうち、实景图に近いとされる山水画をのぞき、理想的な山水の姿を描いたと考えられている作品は16にのぼる(表1)⁵。このうち掛軸の山水画が14組21幅(作品No. 1-14)、卷子が2巻(No. 15-16)となっており、本稿では画面形状の相違、掛軸の構図が晩年に描かれた卷子の構成に影響を与えた可能性の2点を考慮し、掛軸を対象とする。

掛軸14作品のうち、四季山水図など、季節の移り変わりを表現したものが3組10幅(No. 6, 9, 11)画面上部に詩の賦された詩画軸の形式をもつものが7幅(No. 3, 4, 5, 7, 12-14)となっている。また5幅(No. 2, 4, 8, 10, 12)は破墨・潑墨とよばれ、画面に一気に墨を注ぎ、淡墨と濃墨によって立体感を表す独特の技法で描かれている。本研究では、詩賦や画題によって山水画にあたえられている意味についてはいったん問題を保留し、21幅を個々の独立した作品として対象化する。以下、幅No.で記す。

表1：雪舟による山水画

作品No.	名称	幅No.	所蔵	寸法 (cm)
1	山水図	①	根津美術館	57.6×34.7
2	山水図	②	根津美術館	最大径31.3
3	山水図	③	京都国立博物館	101.2×33.5
4	山水図	④	正木美術館	99.5×33.7
5	湖亭春望図	⑤	吉川史料館	84.0×36.4
6	四季山水図	春⑥、夏⑦、秋⑧、冬⑨	東京国立博物館	各149.3×75.7
7	山水図	⑩	香雪美術館	88.3×45.6
8	山水図	⑪	菊屋家住宅保存会	22.7×35.4
9	秋冬山水図	秋⑫、冬⑬	東京国立博物館	各46.3×29.3
10	山水図	⑭	個人	25.9×35.7
11	四季山水図	春⑮、夏⑯、秋⑰、冬⑱	石橋銀井市石橋美術館	各70.6×44.2
12	山水図	⑲	東京国立博物館	148.8×32.7
13	山水図	⑳	個人	119.0×35.9
14	山水図	㉑	個人	99.3×39.6
15	四季山水図巻		京都国立博物館	21.5×1151.5
16	四季山水図巻		毛利博物館	39.8×1653.0

表2：分析指標

構成要素	地形	山/水面
	樹木・人為的要素	樹木・建物/道/人物
配置の様相	位置	奥行：近景/中景/遠景 水平：左/中央/右 垂直：上/中段/下
	連続性	連続/断続
方向性	奥行：奥行感、水平：広がり感、垂直：上昇・下降感	

2-2. 分析の流れ

山水画の空間構成の特徴を明らかにするため、まず21幅に共通する山水の構成要素を確認する。次にそれぞれの作品について構成要素の配置の様相を分析的に記述するとともに、それにより空間に与えられる方向性を抽出する。これらをもとに山水画の類型化を試み考察を加えるものとする。

<構成要素>山水の構成要素はおおきく地形と樹木そして人為的要素に区分することができる。地形は山や谷等の地面の起伏と水面を含み、山水画の骨格をなすものである。地形のひろがりの中で樹木や人為的要素はしばしば誘目性を持った要素として点在することになる。人為的要素には建物・道・人物が含まれる。

<配置の様相>山水の構成要素の配置の様相を三次元的な空間の広がりにとらえなおすため、山水画に描かれる空間全体を、前後・左右・上下つまり、奥行・水平・垂直の3方向を持つ幾何学的な空間の広がりとしてとらえ、構成要素の配置の様相を、全体の空間内で相対的にとらえなおす。奥行方向は近景/中景/遠景、水平方向は左/中央/右、垂直方向は上/中段/下へそれぞれと区分し、連続/断続の様相を確認していく⁶。

<空間の方向性>構成要素の配置によって、空間の垂直、水平、奥行の3方向に対応する上昇・下降感、広がり感、奥行感といった動きのある方向性が空間に与えられる。それぞれの作品において卓越する方向性を抽出する。

3. 山水画の分析

①山水画：根津美術館蔵(図1)

<配置の様相>近景から中景の右下に山、遠景の山は左に配置されている。そして、水面が右の山を回りこむよう近景から遠景へ連続する地形となっている。近景の山の右背後にほぼ垂直に松の木がのび、その左の背後には

入母屋の建物がある。建物の中には遠景の山の方向をのぞむ人物が描かれている。

＜空間の方向性＞右へ回りこむ水面の連続性によって、広がり感とともに奥への方向性が創出され、水面により隔てられた右の近景と左の遠景が対照をなす構成となっている。

②山水図：根津美術館蔵（図2）

＜配置の様相＞中景の右下に山があり、それを近景から遠景にかけて右へ回りこむよう連続した水面が配された地形となっている。中景中央に樹木、その右の背後に建物がある。遠景左に舟に乗った人物が描かれている。

＜空間の方向性＞右へと回りこむ水面の連続性によって広がり感とともに奥行き方向の連続性が創出され、舟が広がり感を強調している。右の山はやや上昇感をもっており、樹木がそれを強調している。

③山水図：京都国立博物館蔵（図3）

＜配置の様相＞近景の山は左下、中景の山は右中段におおきく垂直方向に配置され、そのさらに右上に遠景の山がある。近景と中景の間を連続した谷が右へ回りこむ地形となっている。中景の山には木立の間に建物群が見え隠れする。道は近景と中景にあり、近景に驢馬に乗った人物と従者が歩いている。

＜空間の方向性＞右側に重ねられた垂直方向の山が上昇感をあたえるとともに、右へ回りこむ谷が奥行き方向の連続性を創出している。

④山水図：正木美術館蔵（図4）

＜配置の様相＞近景の右下に山があり、中央から右上に中景の山が、遠景は左に陸地で構成されている。近景から陸地まで水面が連続し、やや右へと回りこむよう構成されている。中景の山の右下に建物群、陸地左に建物があり、舟に乗った人物が近景中央と中景左にそれぞれ描かれている。中景上部の山裾は水面に浮き立つよう構成されており、遠景の陸地

との前後関係が非常に不明瞭になっている。

＜空間の方向性＞連続した水面が右へと回りこむことで、広がり感とともに奥への方向性を創出している。また、近景と中景の山は上下に重ねられて配され、その間に余白があることで強い上昇感が与えられ、垂直方向への奥行きが創出されている。

⑤湖亭春望図：吉川史料館蔵（図5）

＜配置の様相＞近景から中景の山が右下に、遠景の山は右側に重心を置いて左右へ広がるように構成されている。右下の山を右へと回りこむよう近景から遠景へ連続した水面が広がる。近景の山を右に回りこむ道が配されている。近景の山には松の木が高く、その左下に人物と四阿が描かれている。

＜空間の方向性＞連続した水面が水平方向と奥行き方向の連続性を創出している。また、近景から中景にかけては樹木等の配置によってやや上昇感が与えられて奥へと連続する構成となっている。

⑥四季山水図 春：東京国立博物館蔵（図6）

＜配置の様相＞近景から遠景にかけて断続的な山が左右からはり出すよう配置され、山の重心は右側に置かれている。近景左下と中央奥右にそれぞれ建物があり、それをつなぐように近景左下から左右に蛇行しながら中景奥の四阿へ向かう道が配されている。近景左下には驢馬に乗った人物と従者が描かれている。

＜空間の方向性＞山間を縫うように空間と道が蛇行しながら登ることで、水平方向の動きをはらむ連続性が奥やや上方への方向性を創出する。近景から中景では、山の重なりにより垂直性が与えられた構成となっている。

⑦四季山水図 夏：東京国立博物館蔵（図7）

＜配置の様相＞近景から中景は断続的な山が下あるいは左右からはり出し、遠景上に独立峰が配置されている。近景から中景右中段の

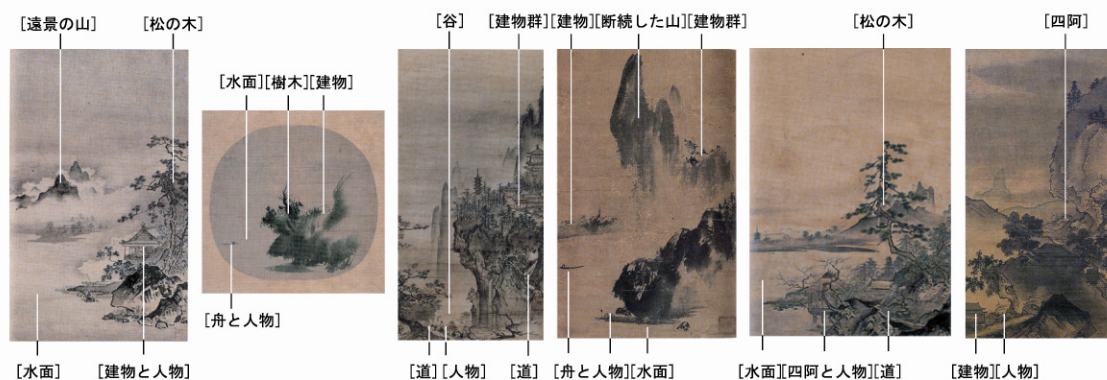


図1:①

図2:②

図3:③部分

図4:④部分

図5:⑤部分

図6:⑥

滝を経て、中景左へと水面が続く。中景中央に松の木、その右下に建物を支える橋があり、遠景の山の頂には塔を中心に建物群がある。
 <空間の方向性>近景から中景は蛇行した空間が水面によって強調されながら高低差をともなって連続し、蛇行しながら奥へと上昇する方向性を与えている。中景から遠景にかけて急激な上昇によって強い上昇感をともなう奥行きが構成されている。

⑧四季山水図 秋：東京国立博物館蔵（図8）

<配置の様相>近景下から中景中段は左右から複数の断続的な山がはり出し、遠景上部には独立峰が構成されている。建物は近景と中景中央下に群、右中段に単体で徐々に上へと点在し、中に複数の人物が描かれている。道は中景中央と遠景右の中段に断続して配されている。

<空間の方向性>近景から中景は山間を縫う空間がやや垂直方向の上昇をともなって左右の広がりをはらみながら奥行きの連続性を創出している。中景から遠景へは急激な垂直方向の奥行きが与えられ、霞によって強調されている。

⑨四季山水図 冬：東京国立博物館蔵（図9）

<配置の様相>近景は右下に小さな岩山が、中景から遠景にかけては断続的に垂直な山が左側に重心をおいて配されている。近景から遠景にかけて、山間に水面と陸地が連続し、山を左へと回りこむような地形となっている。近景の左下に松の木、その右下に橋があり、中景右には舟とともに建物群が配されている。
 <空間の方向性>左側を重心に重ねられた垂直の山が上昇感を与えている。また、連続した陸地と水面が左へと回りこむことによって、奥行き方向の連続性が創出されている。

⑩山水図：香雪美術館蔵（図10）

<配置の様相>中景から遠景にかけて中央に

複数の山が徐々に高くなりながら重ねられて構成されている。それらを両側から水面が回りこみ、近景から遠景にかけて連続した地形となっている。中央の山の右下に樹木に覆われた建物群があり、さらに奥にも建物が配されている。近景左下には舟があり、そこから中央の山に向かって道が山間を蛇行し、そこを歩く人物が描かれている。

<空間の方向性>近景の水面を経て中景から次第に高くなる山が、垂直方向へ上昇感をともなう奥行きを創出している。また近景から遠景まで広がる水面の連続性によって、水平方向への広がり感をともないながら連続する奥行きが構成されている。

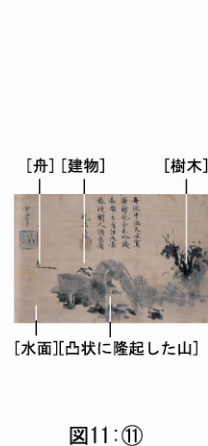
⑪山水図：菊屋家住宅保存会蔵（図11）

<配置の様相>近景から中景中央にやや水平に広がった山が構成され、それを連続した水面が右へと回りこむよう構成されている。山の中央は凸状にやや隆起し、その左背後には建物が配されている。右には同様に山が隆起し、そこにややおおきく樹木が配されている。遠景左には舟が描かれている。

<空間の方向性>右へと回りこむ連続した水面によって、広がり感とともに奥行き方向の連続性が創出されている。また、山がほぼ一定の高さで水平に広がり、さらに舟や樹木等も水平に配されることで、より水平方向の広がりが強調されている。

⑫秋冬山水図 秋：東京国立博物館蔵（図12）

<配置の様相>近景から遠景にかけて、左右から断続的な山がはり出している。山の重心をやや右に置き、近景から中景にかけて水面が右に回りこむような地形となっている。近景左右と遠景中央に建物があり、それらを結ぶように山の間を蛇行した道が構成されている。中景から遠景中央に二人の人物が座っている。



<空間の方向性>山の間を蛇行する空間と道が奥へ連続することで、水平方向の動きとともにやや上方奥への方向性も創出されている。また、右側に連続して重なる断続的な山によって、近景から中景にやや垂直性が与えられている。

⑬秋冬山水図 冬：東京国立博物館蔵(図13)

<配置の様相>近景から遠景へ、次第に奥へと高さを加えながら左右からの山が重ねられている。山の重心は右側に置かれ、中景から遠景の山は上部に垂直方向へとはり出して構成されている。遠景中央に建物群があり、その周囲には樹木が配されている。道は山間を蛇行し、近景右下に舟、中央に人物が描かれている。

<空間の方向性>山間を左右に蛇行しながら空間と道が奥へと連続することで、水平方向の動きを強くはらんだ連続性が創出され、またやや上方奥への方向性が同時に与えられている。さらに右側を重心に山が重ねられ、中景上部の山のはり出しによって、近景から中景にかけて垂直方向への奥行きが創出される。

⑭山水図：個人蔵(図14)

<配置の様相>中景中央に山と陸地が配され、それを左へ回りこむように連続した水面が近景から遠景にかけて構成された地形となっている。中景中央に隆起した山の上部に樹木群があり、その左下には木立の間に建物が見え隠れする。中景右には舟に乗った二人の人物が向かい合って描かれている。

<空間の方向性>近景から左へと回りこむ水面の連続性によって、広がり感とともに奥行き方向の連続性が創出されている。また、中景右に配された舟が水平方向への広がり強調している。

⑮四季山水図 春：石橋美術館蔵(図15)

<配置の様相>近景から遠景にかけて左右か

ら断続的な山がはり出している。中景右中段に垂直性の強い山が構成され、山の重心は右側に置かれている。近景中央に樹木、その右下に四阿があり、遠景中段の中央にはややおおきく建物が描かれている。道は近景右下から四阿を経て右上へと蛇行しながら構成される。

<空間の方向性>近景から遠景へと空間が左右に蛇行しながらやや上へと連続することで、水平方向の動きをはらんだ上方やや奥への方向性が創出されている。また、近景から中景にかけて上昇感が与えられている。

⑯四季山水図 夏：石橋美術館蔵(図16)

<配置の様相>近景から遠景へ断続的な複数の山が右に片寄って構成され、とくに奥は強い垂直性をもつ山で構成されている。近景左下から中景にかけてわずかに水面があり、右へ回りこむような地形となっている。近景中央に樹木群が配され、その左下に建物と舟、その右奥の中景中段には柵に囲われた場所が配され、二人の人物が描かれている。

<空間の方向性>右側に配された山が、除々に上へと重ねられることで上昇感が創出されている。また、山が右側に片寄り、さらに水面が右へと回りこむことで、奥行き方向の連続性が構成されている。

⑰四季山水図 秋：石橋美術館蔵(図17)

<配置の様相>近景から遠景まで左右から断続的に山がはり出し、とくに遠景右は高さのある山が構成されている。近景右下から中景にかけてやや高低差をもった水面が構成されている。遠景やや左に建物群、近景左に樹木、その右下に舟に乗った人物が描かれている。道は近景から遠景へ断続的に配されている。

<空間の方向性>山の間を縫うように空間と水面が連続して蛇行することで、水平方向の動きをはらんだ奥への方向性がやや上昇しな

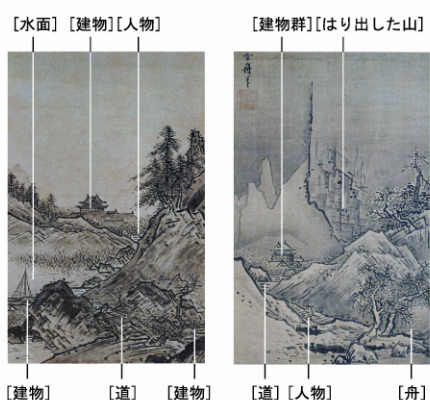


図12:⑫

図13:⑬

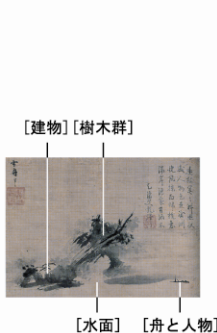


図14:⑭

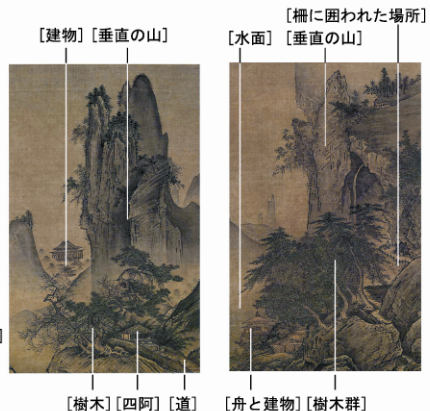


図15:⑮

図16:⑯

がら創出されている。近景から中景には山によってやや上昇感を与えられている。

⑱四季山水図 冬：石橋美術館蔵（図18）

＜配置の様相＞近景から遠景へと、左下から中央上部に断続的な山が高低差をもって配されている。中景右下には水面があり、各景の山を覆うように樹木が構成されている。その下には道が配され、近景から右へと回りこみ、中景から上部へと登るよう構成されている。

＜空間の方向性＞近景から中景はやや左に片寄りつつも、道が次第に上へと登りつつ空間が連続することで水平方向の動きをはらんだ奥行きが連続性が創出されている。また、次第に高さを与えられ中景から遠景にかけて垂直方向の強い奥行きが与えられ、上昇感をともなう構成となっている。

⑲山水図：東京国立博物館蔵（図19）

＜配置の様相＞中景から遠景の中央に複数の山が重ねられ、最奥部に垂直の山がある。それらを左右両側から近景から遠景まで連続した水面が構成されている。中央中段に樹木、その右下に垣根で囲われた建物が配されている。遠景右下に二人の人物が向かい合って舟に乗る姿が描かれている。

＜空間の方向性＞近景から遠景へと連続する水面が左右への広がり感を与えつつ、奥行きを連続性を創出している。また、山が垂直方向に重ねられることで強い上昇感をともなう奥への方向性が与えられる。

⑳山水図：個人蔵（図20）

＜配置の様相＞近景から中景にかけて複雑な形状を持つ山が左右から断続的にはり出して重層する。遠景は水面が左右に連続して構成され、水面の奥は山並みによって境界づけられている。近景中央の山に樹木が垂直にのび、その右に複数の建物、左には四阿がある。山間を近景から四阿へ道が蛇行し、近景には二

人の人物が描かれている。

＜空間の方向性＞近中景では、断続的な山の間を縫う道の連続性によって水平方向に動きのある奥行きが創出され、岩山や樹木が強い垂直性をもつ構成となっている。これに対し遠景では水面が左右水平に連続することで、近中景の岩山部と、遠景の水面部の構成が対照をなす構成となっている。

㉑山水図：個人蔵（図21）

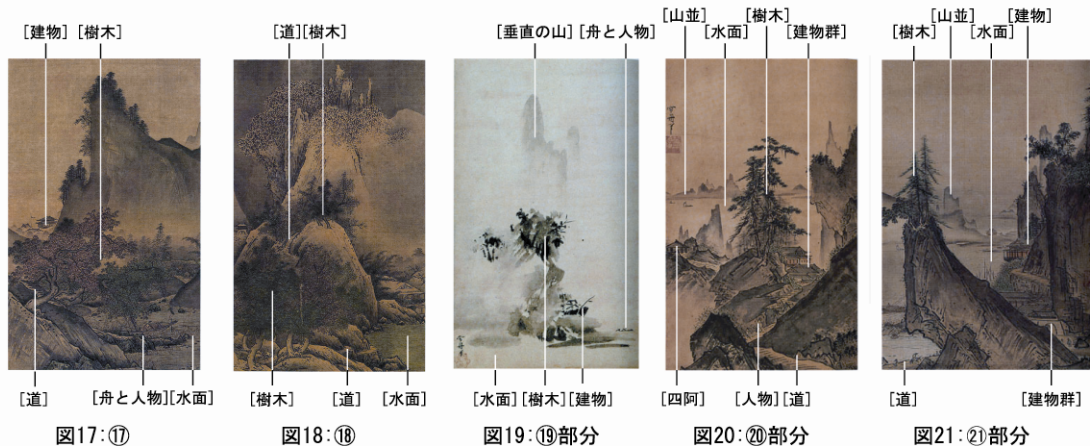
＜配置の様相＞近景中央にやや傾いた山があり、垂直性をもつ中景の山が右からはり出して重層する。遠景には左右に連続した水面があり、さらにその奥に山並みが構成される。近景の山頂に垂直にのびた樹木があり、建物は近景から中景に点在している。道は近景左下から中景の右奥へと蛇行しながら配されている。

＜空間の方向性＞近中景と遠景は対照的な構成で、前者は高さのある断続的な山間を道が蛇行することで、水平方向をともなう奥行きをもち、同時に強い垂直性をともなう奥行きが創出されている。一方、遠景では水面が左右へと連続することで強い水平方向の広がりが与えられている。

4. 空間構成の特徴

4-1. 空間構成の類型

21幅の山水画について、構成要素の配置の様相と空間の方向性に注目して空間構成を整理すると、おおきく5つの類型を抽出することができる。各タイプについてアイソノメトリック図法によりモデル化し、構成要素の配置の様相と空間の方向性を同時に表示することを試みた（図22-26）。また各作品をタイプに分類し、その空間構成がモデルに示したものと近いか遠いかを相対的に評価し、欄ごとに上段左から右の順に配列した一覧表を示



す(表3)。

1) 断続上昇タイプ

<配置の様相>

近景から中景にかけて、左右両側から断続的に山がはりだし、左右に蛇行した空間が上昇しながら連続する。樹木や建物は高低差のある地形

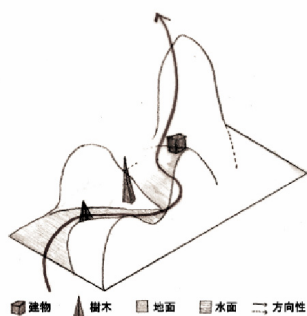


図22 断続上昇タイプ

に点在し、遠景は画面上に垂直性をもつ断続的な山で構成される。

<空間の方向性>近景から中景にかけて蛇行する山間の空間が奥へと連続することで、水平方向と垂直方向の動きをはらんだ奥への方向性が与えられ、樹木や建物の配置がこれを強調する。また断続的な遠景の山が奥へ上昇する強い垂直性をつくり出している。

2) 両側回りこみタイプ

<配置の様相>

画面中央に中景から遠景へ、複数の山が重ねられ、近景の水面がその左右両側をまわりこむようにして遠景へと連続する地形で構成される。

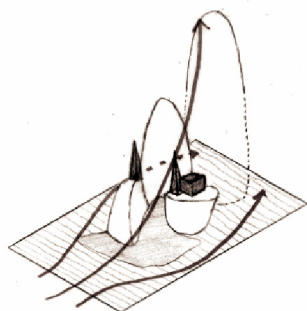


図23 両側回りこみタイプ

中央の山の右下に建物が配され樹木は中段に点在する。

<空間の方向性>近景から遠景にかけて中央部に次第に高くなりながら連続する山の量塊によって、上昇しながら奥へ連続する方向性が与えられている。同時に中央の山の両側を回りこむ水面の連続により、水平方向にもやや動きのある奥行き方向性を与えている。近景から遠景へ連続する二つの対比的な方向性を特徴とする。

3) 片側回りこみタイプ

<配置の様相>

近景から中景にかけて左右いずれかに片寄って山が重ねられ、それを近景から

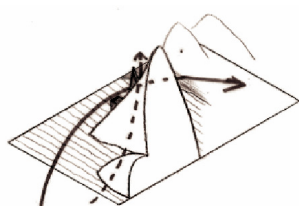


図24 片側回りこみタイプ

の水面または谷が回りこむようにして遠景へ連続する。しばしば近景に樹木や建物が配される。2幅を除き、全体の山の重心は右側に置かれた右回りこみの構成となっている。

<空間の方向性>近景から遠景にかけて連続する水面や谷が水平方向の広がり感をともなう奥行き方向性を与えている。また、片側に重心を置いて重ねられる山や垂直に配された樹木によって近景から中景にかけて上昇感をともなった奥への方向性が与えられている。

3) 蛇行タイプ

<配置の様相>

近景から遠景にかけて、左右両側から断続的に山がはりだし、山の間を縫うようにして空間が



図25 蛇行タイプ

左右に蛇行しながら奥へと連続する。蛇行する空間は奥に行くにしたがってやや高くなっており、最奥部に建築物など、誘目性の高い要素が配置されるが、全ての場合において左奥への配置となっており、断続的に配置される左右の山の重心は右側に置かれている。

<空間の方向性> 山の間空間が蛇行しながら奥へと連続することで、水平方向の動きをはらんだ奥への方向性が卓越する。この方向性はやや垂直方向への上昇もともなう。また右側に重心を置いて重ねられる断続的な山の量塊の連続によって、近景から中景にかけては垂直性をはらむ奥への方向性が与えられている。

5) 遠近対比タイプ

<配置の様相>

近景から中景にかけて、特徴的な形態をもつ岩山が左右両側から断続的にはりだし、近景中央に樹木、中景右

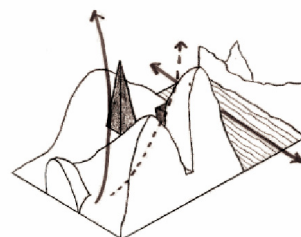













図26 遠近対比タイプ

中に建物が配される。遠景は左右に広がる水面で、その奥は山並みで境界づけられている。

<空間の方向性>近中景では特徴のある岩山の形態によって複数の強い垂直性が与えられ、樹木の配置もこれを強調する。また断続的な岩山の間を縫う空間が水平方向の動きを持って奥へと連続し、近中景は複雑な方向性を与

表3 空間構成の類型

断続上昇タイプ	両側 回りこみタイプ	片側回りこみタイプ	蛇行タイプ	遠近対比タイプ
 ⑦ ⑧  ⑬	 ⑱  ⑩	 ① ⑤ ④  ③ ⑬ ⑨  ⑪ ② ⑭	 ⑬ ⑮ ⑫  ⑰ ⑥	 ⑳  ㉑

えられている。これに対し遠景では左右に広がる水面が強い水平性を与えており、近中景と遠景とが対比的な方向性をもつ特徴がある。

4-2. 類型間の空間的關係

5つの類型がもつ空間の方向性は、おおきく3つに区分して捉えることができる(図27)。まず山の量塊等が、奥行き方向に徐々に高くなりながら重層することで与えられる方向性で、徐々に上昇しながら奥へと進む、上昇感と奥行感を併せもつ方向性(上昇奥行とする)である。次に山の量塊の間にある水面や空間が連続することによりもたらされる方向性で、これは左右に回り込みまたは蛇行することで水平方向の動きをはらみながら奥へと進む広がり感と奥行感を併せ持つ方向性(広がり奥行とする)である場合と、水面や空間が主に水平方向にのみ連続し左右の広がり感のみが卓越する方向性(広がりとする)にわけて捉えることができる。

5つの類型が持つ方向性は、この3つの方向性の組合せとして理解することができる。まず断続上昇タイプでは、近景から中景にかけてはやや蛇行しながら、遠景まで上昇するひとつの方向性が卓越しており、上昇奥行と広がり奥行が統合された方向性として捉えることができる。両側回り込みタイプ、片側回り込みタイプ、蛇行タイプはいずれも広がり奥行と上昇奥行きが近景から中景または遠景にかけて並置され、広がり感、奥行感、上昇

感が複合的に組み合わされている。遠近対比タイプは近景では強い上昇奥行が、遠景では広がり感が卓越し、近中景と遠景で空間の方向性が転換している。

6. おわりに

雪舟の山水画に描かれる空間構成に注目して、21幅から5つの類型を抽出し、各類型の空間的關係を整理することができた。今後はこれらをもとに卷子の空間構成分析を行い、総合的に空間構成の特徴を明らかにしていきたい。

注記

- 1 沼田頼輔『画聖雪舟』聚精堂、1912他。近年では、畑靖紀『雪舟山水画研究』2001、金澤弘『雪舟の芸術・水墨画論集』秀作社出版、2002等があげられる。
- 2 山下裕二編『雪舟はどう語られてきたか』平凡社、2002
- 3 畑靖紀「山水長巻研究：そのくかたち」とく意味>をめぐって『天開圖畫』2号、1998他
- 4 萩島哲他『広重の浮世絵風景画と景観デザイン』九州大学出版会、2004、小野恭平「山水の楽・序説：中世詩画軸の題詩からみた」日本建築学会計画系論文集、第551号、2002
- 5 山口県立美術館他編『雪舟等楊—「雪舟への旅」展 研究図録』中央公論美術出版、2006、p29,p305-307の編年私案、研究図版目録をもとに模倣によらず極めて実景図に近いものを除く経年順の作品リストを作成。
- 6 雪舟に限らず、東洋の山水画においては、西洋の線遠近法と異なる三遠法(高遠・深遠・平遠)、遠くのを大きく描く逆遠近法など独特の遠近表現がほどこされ、また山水の全貌を描かず、一部を描くことで逆に全体的な理念を表現する「残山剩水」の思想的背景も知られている。個々の作品について山水の形態の読み解きが困難である場合については明記することとした。

図版出典

- 図2-4、10、19-21：『雪舟 Sesshu』より引用の上、加筆。
 図6-9、12-13、15-18：『日本美術絵画全集 第4巻<雪舟>』より引用。トリミングの上、加筆。
 図1、5、11、14：『雪舟等楊—「雪舟への旅」展 研究図録』より引用。トリミングの上、加筆。
 図22-27：筆者作成

(平成19年12月21日受理)

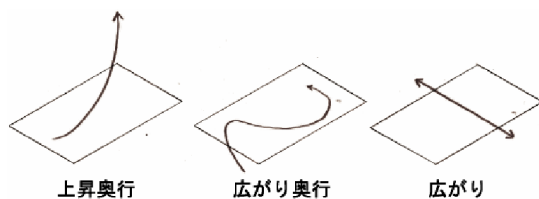


図27 空間の方向性